



一字露顯 第六

字露顯よりけよさ久ふ結指を衣

ころろ長〜の春の怪空

仰空乃身身強年筋か以て

十羽二十羽等々斗一水

羽只の羽水下小様様まき

雪八の身より怪空の片

枝露を水とて候葉子葉よ

吾人の空の身身中枝

永機

太年

羽五

羽年

予雲

機

太

五

附けて立笠を着の四句は後中尾  
 何々の字を無名とて一より  
 実如くも茶屋のあらしに  
 山椒一粒雷よけの鳴る  
 雪を梅の深き小窓に  
 梅を死ぬ氣を又此之  
 むつゝ〜化城喻品を後  
 魚もももも〜浪出物足  
 月とこらもさ高の影りま  
 肌を赤くする冬洗の音  
 名えん尻の痛癢も古を

梅 雲 太 五 檜 香 五 太 檜 雲 太

四つか〜束のゆき提灯  
 夜花より水鏡す仕りけ  
 庭空も〜寺の草烟  
 静寂の裏の抄圖の抄車不  
 母の〜子に賣るる病ひ  
 麻布〜市を解所いよん  
 先ん〜能走小阿多と  
 一昔と引とあら終るあ  
 妙汲〜居る雪の  
 郭公よ〜雪の初春之  
 上野太子の御分

雲 梅 五 太 雲 梅 五 梅 雲

龍の千句

七

道留を待てし人の心入道  
 降まらんす所の末は六利く  
 大井戸を重なりし三四年  
 抄病と申すは遠世の形如  
 ぞと正丸様と云ふ青の月  
 借りけりし事如縁の  
 志梨子の京を去るも茶生の浦  
 片乳様と云ふ事よまあり  
 又そを遊水の智の抄の付  
 世とらふ時を能く観  
 藤原の神難の唐よ一まあり

大 五 檜 太 檜 青 宜 檜 松 五  
 五 五 五 五 五 五 五 五

何れも等量に海系より水で  
 強固新造の惣人の何れも持て  
 何れも自らより何れも其の  
 強固新造の惣人の何れも持て  
 又せし事意味の何れも持て  
 等量を一つは鼻先より其の  
 等量を一つは鼻先より其の  
 夜りし事かろうと云ふ証の  
 何れも持てし事かろうと云ふ証の  
 何れも持てし事かろうと云ふ証の  
 何れも持てし事かろうと云ふ証の

檜 太 檜 青 宜 檜 松 五  
 五 五 五 五 五 五 五 五

君子と云々  
 又...  
 大...  
 光...  
 借...  
 大...  
 さ...  
 お...  
 何...

大 宣 五 雲 梅 檄 五 宣 梅 電

三ッ

近年...  
 結納...  
 少...  
 橋...  
 結...  
 七...  
 祝...  
 成...  
 吃...

梅 宣 五 雲 太 橋 檄 宣 五 梅

むつとくを暑い自らの落むら  
 源もすく家産石の如死  
 日記をいぢるとよき揚物  
 掃うして是を名をふ朱統  
 度會ハ重海よするはよ詩  
 西日押つゝ驚る法 夢  
 續て可る跡も箸木の如やらん  
 母も娘も多腹をさきあり  
 仰り書さうとすのハ煙ら〜  
 叩くふみ箱姑旬も色りり  
 すい〜と伸たつ息の麻呂

大 雲 五 妙 石 梅 檝 宜 妙 太 宅

孫を回者よ〜と心は揺り  
 舞基踏まてハ口〜如旅役共  
 策羅き如禪引 招系  
 三斗搦二度りか〜張はて  
 小大名〜も 供のぞら〜  
 元形如死く名ゆる沖の自  
 沙黄〜ゆゆる雲を如虫  
 新書ハ〜と昔〜も障入〜  
 招くと成如ハ容も散成  
 を〜と〜と別々腹知〜案  
 か〜と〜と〜ハ袖見〜と

五 橋 太 雲 宜 橋 五 石 妙 宜 檝

物事の初を初つし階出  
如多きも志こし流し場の等  
枯れし木も休令れ花は春  
若れし水もよれ小川の果

梅 大 宜 概

永概十六太来十四新五十六梅年十五  
予雲十五雲第一巨石二青宜十  
松場六碧法二蓬水三

二字返音 第七

梅年

花の咲き宛峰とて又空  
春の園形葉は推葉の宿  
糸籠中細きたつまよはさうらん  
つま合出の事部よりり  
宿きうも如きと空のまひる  
まのうらふとそらるる三日月  
唐の宿屋の塘吹竹よりり  
廣口着道入 袖の冷き如

予雲 永概 太来 新五 梅 概





千両の幣の幣又の末突と  
 金羽おあきいすの旅人  
 不器用馬の多におもて候  
 うら柿付の痛の候候と  
 よに向ひの多きもの多の痛  
 延の甚の種おはる多  
 幸塔遠く候お骨にカキ續  
 而の笠着て候ひより  
 足物を不三カキ候よと云ふ事  
 笑の被り候ひより元結  
 着病にお母の定よ道より

檄 宜 電 檄 太 檄 五 宜 電 檄

着りの多き人々は難矣  
 物移り花と候お客お身や  
 寒い候候一申す世の中  
 お月へ毎日物お互に層層  
 遠の目見ぬの多き候  
 驚の多き候と申す候  
 垣結思ふ候の佛手柑  
 端端の多の候と申す候  
 此の多の候と申す候  
 礼状の心も多し候と申す候  
 遠の多の候と申す候

檄 宜 電 檄 太 檄 五 宜 電 檄





りけれをひき物多しとのこと  
邪子多時より獲心者多  
是吹空世に於ては其の  
名も申すべし之百も多し

松 五 雲

松年十五 予雲十六 永撮十六  
太来十四 邦五十五 碧海二  
松堀十二 青宜十

三字中略

第八

六月一日

予雲

是より其の世に於ては其の  
入りたるもの多し松山の  
無所無余り汝昔と今と  
是より其の世に於ては其の  
初より其の世に於ては其の  
此より其の世に於ては其の  
新語を尋ねるは其の  
赤いより其の世に於ては其の

松年 太来 邦五 永撮 松堀 青宜 碧海

閑情より出た地角より通りぬけ  
 長歌の碑の傍にぬけぬす  
 うららら春舟叩て驚きし  
 うらら木の葉はうらら  
 時を度ふと海に結ぶ一之  
 提燈品よりお舞のまゆ  
 谷の湯は煮えつとてとて  
 秋の移を燈る船のよの  
 補ひお葉よよあると葉候と  
 牙ともいへる母と  
 名の通り純子の中へお純子口

梅を五太海檝語宜空五太

二

睡抱の波手強心多之  
 花より水より上考に  
 人焼けぬりぬるも家  
 表乞食の襦袢山より  
 半玉の飾る道より  
 握系は袖の柄とて  
 曲玉一つの空に  
 蒜の引すり冬に刺とさ  
 面加うとて  
 糸を  
 歎

梅宜空檝五太海檝宜空檝

兼戸四より少の持山の三人  
 善光寺様と練の生佛  
 糸針無と高ひの  
 うまのままは是れとも身の時  
 解の清水の精も切さう  
 松島を影水と流流た坂  
 神袋島と覆ふの八好  
 古くは六草咽れは切り  
 茶めしと大松時雨す  
 花圃は住無きう孔宿外也

五 播 太 宜 為 撒 五 太 宜 為 撒 五 播

持そのなりをよすを文又之  
 一帯の志ししは流寸鬼灯  
 洞知る水色山々ら一子挿  
 而も糸より水はくさるるの反  
 大方ハ廣道りするは在る  
 皇代も雪踏も去る踏切  
 衣より昔室の所は山と寺  
 音掛丸所は彦心町中

宜 為 撒 五 太 宜 為 撒 五 播



おのゝこゝろをいふ侍よりもさうよ  
 景観のけだのふれはむし  
 いふよりむしは新者の引上り  
 実ぬくやうな御守の言  
 床の間に投ぬる床の移ひ  
 括さく〜付て曝はさう  
 素て結ひぬるお守を  
 障のむす〜帯と  
 志平〜と勢を  
 碓よりけむ六半と物を扱  
 厚のむしは碓を扱

梅 太 五 電 太 道 太 五 梅 五 太

おのゝこゝろをいふ侍よりもさうよ  
 景観のけだのふれはむし  
 いふよりむしは新者の引上り  
 実ぬくやうな御守の言  
 床の間に投ぬる床の移ひ  
 括さく〜付て曝はさう  
 素て結ひぬるお守を  
 障のむす〜帯と  
 志平〜と勢を  
 碓よりけむ六半と物を扱  
 厚のむしは碓を扱

梅 太 五 電 太 道 太 五 梅 五 太



次ノ向子中ノ、廣重ノ取本  
上ノ字ノ、向子中ノ、  
着トシテ、龜戸ノ、  
南田ノ、

梅 機 電 梅

予云十五梅年十七太年十四  
新五十五永禄十五松嶋八  
青宜九松法 二柴良四  
遂分 一

賦 漆 何 第九

此ノ、  
漆ノ、  
予云  
松嶋  
永禄  
梅年  
松嶋  
青宜  
太年  
松嶋  
五

静五







こころの感念をたゞてて舟に  
修短を機を門より引張  
たつきりと日和続に船の  
福をあの空に消るとも  
或隙を視て生と死の境  
花葉は山に随って流る  
七十にトコノ波ひたりは生  
切るといふも相ハ様  
何と云ふも吾止るは付け  
此を聲と云ふも此を  
後名あるも心所命之

五太電太機太機太

志ありと云ふと機を  
初機を引張るハ又小袖  
何と云ふも舟の中は機  
有るも希と云ふも機油切  
是も云ふも留るも機油切  
今と云ふも舟の機を引張  
長と云ふも舟の機を引張  
ナウ  
漏れけふも舟の機を引張  
結ぬも舟の機を引張  
之機を引張るも舟の機  
舟の機を引張るも舟の機

五太電太機太機太

湖系々演山古浦子ありは  
別子用之八入りぬ亦尚  
影影中様りて身は初 家  
山笑ふ之州より物  
五 歳 松 六

静五十五 永藏十五 松年十七  
予雲十六 右年十六 青垣七  
松嶋五 笠仙二 孝節四  
柴五三

賊人何 第十

右年

心 澄む之物松松松  
赤色赤色徐子軍中甲子  
子何田其親向一叔耕上  
何々々々々々々々々々々々  
酒の外堅吾は松松松  
乾々々々々々々々々々々々  
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤  
松入相藏おおるはつち

五十有八ノ新ニモ氣マカ  
 料程廿ハ新ニモ氣マカ  
 内陣ハ為メ下ノリマカ  
 ひとと能ク元氣盛ハ白標  
 反故ヨリノ標セハハ卷ラ  
 其ノ少ク年ハ物又物  
 山ノ先亦盛ルヨリ此  
 立物ハカキテ  
 反ハ年ハ如ク如ク  
 海ノ客船ハ煙ハ  
 孝  
 巨  
 五  
 撤  
 宜  
 太  
 極

送  
 五  
 極  
 太  
 宜  
 撤  
 五  
 巨  
 石  
 孝  
 節

二

水口ハ年々盛盛ニ  
 生ナリトモ  
 春ハ日ハ  
 暮足  
 心  
 二艘

極  
 太  
 宜  
 撤  
 五  
 太  
 宜  
 撤  
 極

生の直よさそは荷の敷長刀  
 度木いつらよ濁る面は磁  
 灯と白の中とワリぬき編み障子  
 輛汁はとろろの多野野ぬ  
 中々や磁石の針の山り中  
 波の刺<sup>ヨ</sup>糸糸の障子のり  
 夜は身好人の世おのりく<sup>ニ</sup>身  
 帰るぬあま〜言い<sup>ニ</sup>嘆  
 泣を身腫を酒の料よまを  
 つれぬくすまの涙のあま  
 子修等の名句くと指おそ

五節 太宜 弁梅 紫鳥 橋

三  
 明地は嶽よ石を積りけ  
 白の束は如の曇まに河峯通  
 禱は啼くははと我あ時  
 又旅利屋ぬき<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>あ  
 高は<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>の神よまのせま  
 機<sup>ニ</sup>のふ暮の霧<sup>ニ</sup>のあふ家<sup>ニ</sup>  
 柳<sup>ニ</sup>立ちま<sup>ニ</sup>りハ<sup>ニ</sup>影<sup>ニ</sup>のなま<sup>ニ</sup>くま  
 浅川の流き<sup>ニ</sup>のう<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>の波  
 数珠くけ<sup>ニ</sup>の霧<sup>ニ</sup>のあ<sup>ニ</sup>  
 拍把<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>結<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ね<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>隔<sup>ニ</sup>くら  
 つと<sup>ニ</sup>定<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>看<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>切<sup>ニ</sup>

橋 宜 鳥 紫 弁 梅 太 宜 五 節







融るるの勢の叫ぶ乃のつたを  
言基くけよ早水水まき  
此島の海の家より花梅を  
嘯り長夜をながれ

梅 檜 松

石年十三 翁五十四 年空十三  
梅年十三 永檜十四 青宜七  
松塙七 蓬州三 巨石二  
紫岳四 孝節十

披口席上

守我の貞翁もさけ時を  
通すも引おせり大天敷  
若き多よ斗り峰一実松式  
つらふり子の梅もま由と  
幣のあまうにほおま地涼

永 檜  
翁 五  
太 年  
予 空  
梅 年

松蘿谷の文略

一も至る千白の輝く部一公  
 春湖  
 等栽  
 挑富  
 字山  
 幹雄  
 吳仙  
 曹海  
 三十字  
 松旗  
 木突

神代竹筥外をやも成り時  
 管笠  
 印子 五日の味を子句一採  
 成推  
 大島  
 碧海  
 碧平  
 瑞一  
 尚古  
 賊居  
 巨石  
 立志  
 三病

境内のありとくし物風なる  
 王女のさきりさくけさる白牡丹  
 花のく女色香い醒れ花の葉  
 とりあくる月さ昔と揃うて帯  
 けしきん馬車も白の羽の装  
 さくはは新しきく之昔は也  
 多代も輝けおのふとよほき  
 扇田やま廣うりふ花あは  
 雲を移し換ふりくわハ重符  
 子親傳書か整くまうぬお地  
 又好むおお扇くらんふ宝珠よ

曉南  
 露花  
 素粒  
 晋江  
 蓮衣  
 是州  
 羊山  
 送燈  
 旭扇  
 華若  
 操風

縁をまへて定り照原ふまはし  
 扇のまの年く永きあはし  
 舞う旭おあふか中く花うれ  
 扇のあか法くしきくはうり  
 多由り那きまのひく和時  
 先あてぬうつくま作の扇うれ  
 五位傳ふおおのわお能の梅よえ  
 扇の舞お母よ度うくは若葉  
 母の舞をうりくゆうり若葉水  
 ひと舞ふおあはさうへ外一時  
 皆くお作向く友の木立の春

純吟  
 春鳥  
 花子  
 夷中  
 吐雲  
 此女  
 研文  
 燭半  
 醉甫  
 花機  
 春松

後の世を思ふくを嘆けぬ塚の昔	其鳥
聲子とて天の戸たたく水鏡東	娘五女
一ノハの孫を踏しき田植の水	江波
勢ひや雲を穿ぬくは来竹	其冠
今月而を昔のそとをせ向塚	奈重
水鏡を初の時水鏡源	若節
子木の先をくそを河の家持水	機美
月一の孫を思ふくは来竹	採月
聲ひや相の雲や夏は日	新和
二夜を思ふくは来竹	市川
時とて思ふくは来竹	菟好

容易きを愛ふはく	麓了	松塚
時を思ふくは来竹	正義	

其引

少けくは来竹	時而水	物見宿
而るやの娘を思ふくは来竹	其金	
多都おくは来竹	聲を	
初日や来竹	尋春	
その来竹	紫香	
ひよきおくは来竹	舞悠	
目より来竹	一歩	
来竹	如川	







山末  
花影をみれば自中き世物も如  
とち指しそよもを伴も真に  
少遊の夕暮をそよものそよふれ  
陽より紅をそよものそよふれ  
霞をよそよものそよふれ  
水影より波名のそよふれ  
帰るも東風吹くそよふれ  
花すそよものそよふれ  
夕暮の甲子指のそよふれ  
花すそよものそよふれ

ちき  
永二  
似水  
文雪  
季績  
不角  
素朴  
竹丈  
琴丸  
原志

花すそよものそよふれ  
東の雲をそよものそよふれ  
新雨のそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ  
花すそよものそよふれ

殊雨  
者我  
其我  
雲流  
雲流  
乙瓢  
南歌  
可洗  
宗河  
梅雅  
一旗

もの影おそくはく深し夕阿の空  
竹まの宿まねゆりうと山のうへ  
若婦のうへも又新しうは給くぬ  
程遠きとある戸の暗もや桃の花  
山よ名も妙答をまけくは雲の  
青さしては深しき東のうへは  
影影やあう深きも色は数  
世のまじりまじりやまきまじり所  
暗のまじりまじりまじりまじり  
影いおののうへはくぬしうへ  
昔はまねおとあましうも成りぬ

晴雲 竹ま 柱山 柳糸 浪光 杉雨 流水 芳海 竹橋 栞実 抱徳

まき府のうへはく深し夕阿の空  
知とあまおとあまのうへはく  
まきまじりまじりまじりまじり  
日のおとあまおとあまのうへはく  
とあまおとあまのうへはく  
つるまのうへはくまのうへはく  
まのうへはくまのうへはく  
まのうへはくまのうへはく  
まのうへはくまのうへはく  
まのうへはくまのうへはく  
まのうへはくまのうへはく

晴雲 袖丸 卜早 益良 倉江 藍庭 松宇 妹籠 流水 忍山 葉密





法ひ葉の中うらなれる水うら

蕙前  
涼坪

此の山あふふりりか花

九  
花

川あやあやの山一まをんをてら

松外

水うらな山あやや花うら

松外

中平の山あやや

うらの山あやや

こ代

鏡あやあやの山あやや

屋律

宙あやあやの山あやや

石屋

ひの山あやあやの山あやや

石屋

袖の山あやあやの山あやや

山夕

字の山あやあやの山あやや

末源

丘の山あやあやの山あやや

水

人向の山あやあやの山あやや

猿目

左の山あやあやの山あやや

芳若

右の山あやあやの山あやや

曙空

折の山あやあやの山あやや

北島

山あやあやの山あやや

山

山あやあやの山あやや

山

山あやあやの山あやや

山

山あやあやの山あやや

山

花の香のすまゝに 粧をまむ日如に  
 ねのまゝのわらわらとをなす 香葉  
 情のうねりいりききし 知りし  
 あらすのまを 月も水も  
 人のまじりかた 花の香  
 夕暮れとて 花の香  
 花の香のすまゝに 粧をまむ日如に  
 ねのまゝのわらわらとをなす 香葉  
 情のうねりいりききし 知りし  
 あらすのまを 月も水も  
 人のまじりかた 花の香  
 夕暮れとて 花の香

孤月  
 信交  
 文交  
 空交  
 末交  
 左交  
 一笑  
 松交  
 沙猿

花の香のすまゝに 粧をまむ日如に  
 ねのまゝのわらわらとをなす 香葉  
 情のうねりいりききし 知りし  
 あらすのまを 月も水も  
 人のまじりかた 花の香  
 夕暮れとて 花の香  
 花の香のすまゝに 粧をまむ日如に  
 ねのまゝのわらわらとをなす 香葉  
 情のうねりいりききし 知りし  
 あらすのまを 月も水も  
 人のまじりかた 花の香  
 夕暮れとて 花の香

松水  
 葉交  
 芝交  
 花交  
 雨交  
 腫交  
 空交  
 孤交  
 草交  
 蓮交

花の香のすまゝに

十二

九まゝに取く垣根やこゝろに以て  
 曉雨  
 びら〜んちとて〜〜や秋のこゝろ  
 新甫  
 冬籠ふゆをむきある住居に  
 中出  
 らきつ長澤〜らすま〜ゆゑに  
 うたかた  
 ちり嬉ぬき〜〜常〜の村母め  
 古梁  
 木〜り〜や相田の水もあゝる音  
 玉了  
 大楠み下ま〜暑き日之りり  
 時多遠〜〜〜備〜住ぬ〜  
 暁声

暁声初巻

跋

文所の匠手順宗祇紹承三所  
 多白心教修却の昔もそある  
 其古白ある〜こと句に紙を折加〜  
 〜の〜と遊むあ〜むの五吟〜  
 半通〜し〜のを許〜き〜  
 一は玉あり〜をそ有う候〜の  
 心〜を拵ひ〜住吉千句に  
 ちぬ〜すあ〜又細〜

皇朝の書物  
 皇朝の書物  
 皇朝の書物  
 皇朝の書物

明治十六年仲夏

八月廿五日 廣梅年

男史中書

○其角堂編輯書目

吳々細道 <small>其角翁 自筆</small> 一冊	俳諧又 一冊	二冊
俳諧繪入 八百題 四冊	同 日 <small>左</small> 蓬 二冊	二冊
發句五百題 四冊	同 摺歩行 一冊	一冊

明治十六年十一月九日出板 御届同十二月出板

編輯兼  
出版人

晉 永機

南葛飾郡小梅村六十四番地

發賣人 杏寄半造

浅州區須賀町十九番地



